

わたしたちの大祭司イエス・キリスト

ヘブライ人への手紙 5 : 5 - 10



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年3月17日

大齋節第5主日

聖光教会にて

先ほど大斎節第5主日の特禱でこう祈りました。

「全能の神よ、み子イエス・キリストは大祭司として来られ、その血をもって至聖所に入り、ただひとたび永遠の贖^{あがな}いをま^{まっとう}うされました。……」

また使徒書にも「大祭司」という言葉が出て来ました。

「同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく……」ヘブライ人への手紙 5:5

「キリストは……神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。」 5:10

そこで今日は、イエス・キリストが大祭司であるとはどういうことかを知りたいと思います。

大祭司と言って思い出される名前があるでしょうか。アンナス、そしてカイアファ。彼らはイエスの時代の大祭司であって、イエスさまを十字架に付けた人たちです。そのような神に逆らう者たちではなくて、イエスこそがわたしたちのための大祭司であると、今日の特禱も使徒書「ヘブライ人への手紙」（略して「ヘブル書」）も告げているのです。

聖書に言う本来の祭司、ことに大祭司とは何でしょうか。それは、神と人々の間に立って、神と人々を結びつける人です。一方で大祭司は、神の言葉を人に伝え、神の祝福と赦しを人々

にもたらしめます。他方で大祭司は、人々の願い、祈りを神に届けます。具体的には、人々の携えて来た供え物を神に献げて、人々が神の救いと赦しを受けるために祈ります。人々を神に出会わせる、人を神との喜ばしい交流に導き入れるのが大祭司の務めです。

今日の使徒書・ヘブル書は、イエス・キリストこそがわたしたちのための大祭司だと語りかけます。

「同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、

『あなたはわたしの子、
わたしは今日、あなたを産んだ』

と言われた方〔神〕が、それをお与えになったのです。」5:5

大祭司になるのは自分からではない。神が大祭司という務めと栄誉をキリストに与えられたのだ。

今週土曜日には京都教区で執事按手が行われる予定ですが、同じことが言えます。聖職、執事職は自分で獲得するものではない。神が選んで、神がその人に大切に務めをゆだねられるのです。今の祈祷書にはありませんが、以前の祈祷書の聖職按手式文にはこういう主教の言葉がありました。

「もしこの人々に著しき罪、または執事とせらるるに故障あることを知る者あらば、いま神の御名によりて申し立つべし」

もしこの人には問題があると申し立てる人がいたら、「按手を中止して事の明白になるまで待たなければならない」と定められていました。それだけ聖職按手は神から受けるもの、厳粛なものとされてきたのです。

ヘブル書は、キリストは大祭司という務めと栄誉を神から与えられたのだと述べた後、次のように言います。

「また、神は他の個所で、
『あなたこそ永遠に、
メルキゼデクと同じような祭司である』
とされています。」 5:6

同じ趣旨のことが終わりのほうにも言われています。

「キリストは……御自分に従順であるすべての人々に対して、
永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。」 5:8-10

ここで「キリストはメルキゼデクと同じような祭司、大祭司」と2回も言われています。メルキゼデクとはどういう人か。創世記第14章に登場する謎のような人物です。

これは遠い昔の信仰の祖先、アブラハムの時の物語です。アブラハムの大切な甥のロトが、戦争に巻き込まれて捕虜になり、その家族、財産ともども奪い去られてしまいました。そこでア

ブラハムは家の僕たち 318 人を動員して追跡し、奇跡的大勝利を得てロトとその家族、財産を取り返して戻って来ました。相手はメソポタミアの四つの国の連合軍で、とても勝てるとは思えなかったのです。

勝利を得て戻ってきたアブラハムを迎えた人が二人います。その一人が、「いと高き神の祭司」と呼ばれるサレムの王メルキゼデクでした。メルキゼデクはパンとぶどう酒を用意して出迎え、天地の造り主、いと高き神の名によってアブラハムを祝福しました。創世記に詳しい記述はないのですが、おそらく、ロトを取り戻す戦いは命がけのものであって、アブラハムは必死で神に祈って出発したのだと思います。そのアブラハムたちを祈りと祝福をもって支えたのが祭司メルキゼデクだったのでしょう。奇跡的な勝利は神が与えてくださったのですが、それを現実に可能にしてくれたのが祭司メルキゼデクが存在と彼の祈りであった。それでアブラハムは感謝して、自分が持っているすべてのものの十分の一をメルキゼデクに贈りました。そういう仕方、アブラハムは全身全霊をもって神への感謝を表したのです。

後の祭司、大祭司はモーセの兄弟アロンの血筋、その子孫のレビの血筋を引く者に限定されることになるのですが、それより遙か前のメルキゼデクも、それより遙か後のイエス・キリス

トも、血筋とはまったく関係のない、ただ神によって立てられた大祭司。ほんとうの意味で神と人々の間に立ち、人の救いのために労苦して切に祈る存在。ヘブル書の著者は、その大祭司キリストをわたしたちに伝えようとしているのです。

わたしたちが元気なとき、特別に危険を感じないときは、自分のために祈って支えてくれる存在が必要だとはあまり思わないかもしれません。けれども神さまは知っておられます。聖書は知っています。わたしたちのために本気で祈り支えてくれる存在が必要だということを。ヘブル書は続けてこう言います。

「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。」5:7

これがヘブル書の語る大祭司キリストの姿です。立派な衣装を身にまどってはおられず、堂々たる風格を示しているのでもありません。激しい叫び声をあげ、涙を流しながら神に祈っておられる。聖書のどこにそんなイエス・キリストの姿があったのでしょうか。

第1に荒野の40日です。公の活動を開始する前、イエスは荒野で悪魔の試みに遭われました。死ぬほどの苦しみの中で祈ら

れたのです。それはわたしたちが試みに遭うときに耐え忍んで救われるためです。そのようなとき、わたしたちはイエスにしがみつきます。イエスがわたしたちを抱き締めてくださいます。

第2にマルタ、マリアの兄弟ラザロの墓の前です。「**イエスは涙を流された**」(ヨハネ 11:35)と書いてあります。

第3に最後の晩餐です。あのとき、不安にかられる弟子たちのために、また後の弟子たちのために、イエスは神に「どうか彼らを守ってください」と祈られました(ヨハネ 17:11,20)。弟子たちの不安と、彼らがまもなく経験する挫折と悲しみを思って、イエスは心で泣きながら祈っておられたのではないのでしょうか。

第4は受難の前、ゲツセマネです。イエスは弟子たちに「自分は死ぬほど悲しい」(マルコ 14:34)ともらされました。イエスのゲツセマネの涙の祈りは、ご自分のためだけではなく、むしろ弟子たちのため、わたしたちの救いのためだったのです。

そして第5は十字架の上です。「父よ、彼らをお赦してください」(ルカ 23:34)。涙を流されたキリストは、最後は血を流してまでわたしたちのために祈られたのでした。

わたしたちのために、このような大祭司イエス・キリストがおられます。ヘブル書は次のように語っています。

「しかし、イエスは永遠に生きているので、変わることはない祭司職を持っておられるのです。それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになります。」7:24-25

時々というのではない。思い出した時に、というのではない。イエスはいつも、変わることなくわたしたちのために祈りつづけていてくださる。それでイエスは「御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになる」。

わたしたちのために、わたしたちが滅びないように、わたしたちが生きるために祈っていてくださるわたしたちの大祭司イエス・キリストがおられます。

祈りましょう。

神さま、わたしたちのために大祭司イエス・キリストをお与えくださったことを感謝いたします。どうかイエスがわたしたちのために切に祈っていてくださることを、イエスの祈りがわたしたちを支えていることを教えてください。主のみ名によってお願いいたします。アーメン